

「マタイ2章 メシア預言の成就」

イントロ:

1. マタイの福音書を毎回1章ずつ取り上げ、時代性を考慮しながら解説する。
2. 聖書の世界観
 - (1) 世界はサタンの支配下にある(海外から日本に帰国した時の印象)。
 - (2) そこに「神の国」が侵入してきた。
 - (3) 個々の戦闘では負けることもあるが、最終的な勝利は決まっている。
 - (4) この図式が、インターネット空間にも広がっている。
3. マタイはそういう世界観を前提に2章を書いている。
 - (1) ヘロデ大王の背後に働くサタンの力。
 - (2) 東方の博士たち、またヨセフの一家の背後に働く神の導きと守り。
 - (3) 創世記3:15に預言された戦いが、最終的な局面を迎えている。
4. マタイは4回メシア預言を引用している。
 - (1) ユダヤ人のための福音書。
 - (2) 異邦人の私たちには難解な箇所。
 - (3) 「メシア預言」をキーワードに、神の国の勝利について語ってみたい。
 - (4) 希望と力を受けるために、苦難の中にいる人に忍耐が与えられるために。

マタイ2章は、「メシア預言」というキーワードで読み解くことができる。

I. マタイ2:6 → ミカ5:2

1. ラビたちが用いた4種類の引用法。第一番目は「預言が文字通り成就した」というもの。
2. 東方の博士たち
 - (1) バビロンの占星術師たち。科学者たちのこと。
 - (2) 3人ではなく多数。
 - (3) ダニエル9:24~37 メシアの来臨の時期を預言している。
 - (4) ダニエルはバビロンの占星術師の長であった。アラム語で書かれている。
 - (5) 民 24:17 バラム(バビロンの占星術師)。「ヤコブからひとつの星が上り」
3. 彼らを導いた星
 - (1) その方の星。
 - (2) 東から西に、北から南に、最後は一軒の家の上にとどまる星。
 - (3) シャカイナグローリー。(羊飼いたちもシャカイナグローリーに導かれた)。

4. ヘロデの反応

- (1) 偏執狂であるヘロデは、恐れ感った。エルサレム中の人と同じ。
- (2) 専門家を集めて、メシア(キリスト)誕生の地を調査させる。
- (3) ユダヤのベツレヘム。ミカ5:2。ラビたちの常識。
- (4) ヘロデは博士たちを呼んで星の出現の時間を突き止め、嘘とともに送り出す。

5. 博士たちの礼拝

- (1) 星が再び現れる。
- (2) 家に入って、幼子を礼拝する。最初の異邦人によるメシア礼拝。
- (3) 贈り物。
 - ①黄金(王)
 - ②乳香(神性)
 - ③没薬(死)

6. 私たちへの教訓

- (1) 近い人と、遠い人との対比。
- (2) メシア礼拝は、犠牲を払うに値するもの。

II. マタイ2:15 → ホセア 11:1

1. 第二の引用法。実際の歴史的事件を取り上げ、それを「型(タイプ)」として説明する。
2. 「型(タイプ)」があるなら、「本体(オリジナル)」がある。
3. 出エジプトとは、神の子である「イスラエルの民」がエジプトから救出された事件。
4. 「本体(オリジナル)」は、御子イエスの救出。
5. 「エジプト」とは「ヘロデの脅威」のこと。
6. 実際に起こった内容
 - (1) 主の使いが夢に現れる(ヨセフ中心の記述)。
 - (2) 「幼子とその母」。イエス中心。
 - (3) 資金は、すでに用意されていた。
7. 私たちへの教訓
 - (1) クリスマン生活には、敵からの妨害がある。
 - (2) しかし、神は必ず私たちを「エジプト」から呼び出してくださる。
 - (3) その確信をもって、この世に出よ。

Ⅲ. マタイ2:18 → エレミヤ 31:15

1. 第三の引用法。実際の歴史的事件を取り上げ、それを適用(相似点の一つあればOK)。
2. ヘロデは残忍な王。
アウグスト:「ヘロデの息子であるよりも、ヘロデの豚である方が幸いだ」
死ぬ前に、妹のサロメに遺言。ユダヤ人の指導者たちを殺せ。
3. ベツレヘムの2歳以下の男の子をひとり残らず殺させた。
4. エレミヤ 31:15 を引用
 - (1) ユダヤ人の息子たちが、バビロンに連行されようとしている。
 - (2) 母親たちがラマ(エルサレムの北にある町)で嘆いている。
 - (3) ラケル
 - ①ヤコブ(イスラエル)の最愛の妻。
 - ②ラケルはイスラエルの母の象徴。
 - ③ラケルはラマの近くに葬られた(現在のラケルの墓は違う)。
 - (4) ベツレヘムの母親たちは、2歳以下の男の子たちを失い、嘆き悲しんでいる。
 - ①相違点は、多い。ラマとベツレヘム、捕囚と殺害。
 - ②二度と会えないという意味では、同じ。
5. 私たちへの教訓
 - (1) 悲惨な出来事の先にある希望の光。
 - (2) エレミヤは、捕囚からの帰還について預言した。
 - (3) 神の計画を長い目で見ると、ラケルの嘆きは捕囚からの帰還という希望への序曲。
 - (4) ベツレヘムで起こった嘆きは、メシアによってもたらされる希望への序曲。
 - (5) 悪の力と神の国とがぶつかり、深い嘆きをもたらされた。
 - (6) しかし、やがて神の国が最終的な勝利を得る。

Ⅳ. マタイ2:23 → 「預言者たち」の預言

1. 第四の引用法。メシア預言を要約した引用法。
2. 「この方はナザレ人と呼ばれる」という預言は旧約聖書にはない。
3. ヘロデの死後
 - (1) ヘロデの王国は3人の息子たちに分割された。
 - (2) ユダヤを継承したのは、アケラオ(3千人を殺した残忍な王)。
 - (3) ガリラヤを継承したのは、ヘロデ・アンティパス。
 - (4) ベツレヘムではなく、ナザレに帰還する一家。

4. ナザレ人の意味

(1) 紀元1世紀のユダヤ人の認識。北は愚か、南は賢い。

「金持ちになりたければガリラヤへ、賢くなりたければエルサレムへ」

(2) エルサレム神殿崩壊(70年)以降、ユダヤ教の中心はガリラヤに。

(3) イエスは、さげすまれた寒村ナザレで育った。

5. 私たちへの教訓

(1) 徹底的に「仕える者」の姿をお取りになったイエス。

(2) その最後が十字架である。

(3) ここにいる私たちから「仕える者」になろうではないか。

結論

1. メシアは文字通り、ベツレヘムで誕生された。

2. 神の子イエスがエジプトから救出されたように、私たちも救出される。

3. 神にあっては、悲しみは必ず希望につながる。

4. クリスマン生活は、しもべとしてイエスの足跡をたどる生活である。